

菲芭

NOT
BECAUSE
OF
COLOUR

有吉佐和子

中央公論社

非
色

定價四六〇問 ©

昭和三十九年八月一日 印刷
昭和三十九年八月八日 發行

著 者 有吉佐和子

裝幀者 中 林 洋 子

發行者 宮 本 信 太 郎

印刷者 山 田 博

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

非 色

(ひしよく)



私は自分の生い立ちについて多く語ることを好まない。父親のない娘、片親育ちの子供というもの、は世間にいくらでも例があるからである。貧乏だったということも世間では珍しいことではない。妹より不器量に生れついたからといって、書いて世の人に訴えなければならぬほどの悲劇とは思えない。だから私はそうしたことを陰々滅々と此処に披露しようとは思ってもしないものである。もっとも右のような私のあまり幸福ではない条件は戦争中は感じる暇がなかった。不幸を一番身にしてみ感じる筈の青春期の前半は、私は学徒報国隊という腕章を巻いて旋盤工として夢中で過していた。夜は工員宿舎の一部に泊って、女学生たちはみんなそれぞれの家庭の事情とは関係を断った暮しをしていた。警戒警報。待避。空襲警報。あの最中には、女の子が美人かそうでないかということなど大した問題にはならなかった。

戦災で家を失い、敗戦と共に工場に別れを告げた私は、母と妹と都心を離れた焼け残りの家の二階一間を借りて暮すようになったが、そのときでも貧乏というものの実感はなかった。東京はまっ赤に灼け爛れて、富者や金持と呼ばれる者も一なぎに壊滅してしまっただかに見えた。右を見ても左を見ても焼け出された人々ばかりで、おまけにひどい食糧難時代だ。みんなが飢えていた。食べるものにも着るものにも、みんなが平等に困っていた。

私は直ぐに働くことを考えなければならなかった。女学校は何も勉強らしいことをしないまま、終

戦の年に卒業していた。もっとも学歴が役に立つような仕事は何もなかった。日本の首都は爆弾と焼夷弾で滅茶々々になったところへ進駐軍を迎え入れて大混乱の最中であつた。田舎なら田を耕す仕事の手近かにあつただろうが、根っからの東京育ちの私たちには疎開する縁故先も無かつたのである。田舎なら農家の手伝いという仕事にありつきただろうが、東京にはまともらしい仕事は何もなかった。大会社は復興にすぐ手をつけようとはしなかつたし、みんな手を束ねて進駐軍のエネルギーな仕事ぶりをボカンとして眺めていた。長い戦争に倦み、逃げ疲れ、飢えた人々は、白人や黒人たちのきびきびした動きを驚異の眼で眺めていた。そういうとき、働くといつてもまともな仕事があつたわけではない。近郊の人々は食物を担いで出てきては所々方々の駅の付近に闇市をつくり展げて、怪しげな餛飩や握り飯などから売り始めていた。それを買うためにも、私はどうしても働かねばならなかつた。焼けなかつた人々は、まだ金に換える何物かを持っていたが、焼け出されの私たちは一文無しというよりもっとひどい状態だったのである。

日本の会社はまだ働き出さないうとき、人間を備つてくれるところは進駐軍関係の仕事しかなかった。英語が片言でも喋ることのできる人間たちは、俄かに一段格が上つたように肩で風を切つて歩いていた。私は有楽町の駅の傍にある進駐軍が暫定的に経営しているキャバレーのクロックになった。英語が全然できなかったのに、キャバレーの入口に押入つてイエスとノーをやたらと振り撒いていたら、雲つくような大男のニグロが来て、私にこの仕事を与えてくれたのである。日給制だつた。一日わけも分らず動いているだけで翌朝の五時には一斉に帰りがけに百円札を渡してくれた。百円。私はその紙幣を掴みしめて飛ぶようにして家に帰つたのを覚えてゐる。私の母は涙を流しながら、それでその日のうちに一升の闇米を買つた。早速炊いた銀めしの目にしみるように白かつたことも、立上る湯気の匂に気が遠くなりそうだったときのこと、私は決してこれから先だって、忘れることはないだろ

う。

勤務は午後六時から朝の五時まで十一時間の間に一時間ずつ二回休憩があった。私の仕事というのは入って来た客のコートや荷物を預かって番号札を渡すのが役目で、もし靴を脱ぐ習慣が彼らにあったなら、さしずめ私は下足番というところだっただろう。クロークには私の他に二人の女が働いていて、二人とも私より英語が出来、とりわけ一人はべらべらに喋ることが出来た。私たちの仕事はごく機械的に受取った品物と引換えに番号札を渡したり、番号札と引換えに品物を渡したりするだけなのだから、英語が分らなくても用が足りたが、それでも英語の話せる方が品物の受渡しを無言でやるより、オーライでもサンキューでも言った方がずっとうまい工合だった。それで私は英語の上手な木村ヨシ子について休憩時間の度に勉強することにした。教科書は進駐軍がGIたちに配布した日本語会話のテキストをヨシ子に貰ったものである。女学校では一年と二年の二期まで学習したが、あとは敵性語として学校が教えない方針だったので、私の語学の力は木村ヨシ子が、

「もう嫌や。面倒くさくなつたわ」

と到頭音をあげてしまうほどお粗末なものであった。それでも私は懇願して、帰りがけのGIがチップ代りにくれるチューインガムやチョコレートを月謝に追加して彼女の教示に従おうとした。木村ヨシ子の英語というのも、文法からしっかり覚え込んだものではなく、彼女はロスアンジェルズに生れて十四歳のとき日本に帰ってきたというそのうろ覚えの記憶からなる英語だったから、随分怪しげなものだったが、それでも私にとっては習わないよりましだったのである。

お客のたてこまないとき、私は例のテキストと首っぴきで、単語を一つ一つ記憶しようとしていた。アメリカ人相手の仕事では、言葉が不自由ではどうにもならないと考えたからである。私の働いている「パレス」というキャバレーでは、クロークより収入のいい働き方が他にいくちもあることに気が

ついたからでもあった。なんにしても日本が敗けてしまつてアメリカさんの天下になつてしまつたのだから、まず言葉からものにしておかぬことには埒があかないという意識が私にはあつた。喋れるようにさえなれば木村ヨシ子なんかとチップで差をつけられることもないと私は思つたのだった。私は暇さえあればテキストを展げて、単語と構文の暗記につとめていた。

「何を読んでるんだね？」

私の頭の上から大声が降つてきて私を驚かせた。顔を上げると私が初めて「パレス」に来たとき、私にクロークの職を与えた大男の黒人兵が立っていた。

「本を、読んで、いるんですよ」

私はたどたどしく答えた。

「本を？ 何の本をだね」

「英会話」

彼はグローブのような掌を展いて、大仰に感動してみせた。掌の中が生々しく白いのと、眼を剥いてみせた白眼と、開いた唇の内側が生肉のように赤いのが印象的だったが、悪い感じはしなかった。どういふものか「パレス」に来るG Iのほとんどがニグロだったから私は黒い肌の人間を見るのにもう馴れきつていたのである。終戦記念日というものが、ついこの間過ぎたばかりで、私もそろそろ「パレス」に一年の古顔になろうとしていた。

私が英会話の勉強をしていることに、相手はいたく興味を示したらしく、クロークの向う側から身をのり出すようにして、

「僕が先生になつて實際的に教えてあげようか」と彼は言出した。

「結構ですよ」

「どうして。僕は真面目に英会話を教えてあげるといってただけだ。女がほしいのなら、あちらへ行けばいいのだからね。あなたが心配することは何もない」

「でも、本がありますから、これが先生で、それでOKですよ」

「本は実際の役に立たない。発音のし方は、その本には書いてないし、元来それはG Iが日本語を覚えるためのもので、日本人が英語を覚えるためのものじゃない。あなたはアメリカ人について英語を習った方が、その本より正確に、そして早く覚えられるんだ」

私は当惑して木村ヨシ子の救援を求めた。そのときの私の語学の力では、こうべらべらやられただけで圧倒されてしまったからである。それに彼の口臭は強烈で息詰るようだった。木村ヨシ子は私を抱えるようにして立つと、勤務時間中だから私的な会話は慎んでほしいと言った。すると相手は急に不機嫌になり、

「僕はジャクソン伍長だ。このキャバレーの支配をしている一人だ。それを知ってそういうことを言うのか」

とヨシ子につっかかってきた。

ヨシ子は心持ち蒼ざめた様子だった。私たちはニグロ専門のキャバレーに勤めていたのだが、私たちの給料は事務所の日本人から手渡され、アメリカ側の上司とは殆ど無関係だったからである。一年つとめている私も気がつかなかったし、ヨシ子も彼が「パレス」の支配人とは知らなかったらしい。だが間もなく彼女は流暢な英語でジャクソン伍長の機嫌をとり始めた。早口になると私にはよく分らなかったが、どうやら笑子は内気な娘で英語もよく分らないので、あなたを怖がっているのだと言ったらしい。彼は私に向うと、

「私は怖い人間じゃない。間もなくあなたは分るだろう」

と言いいいて向うへ行ってしまった。

それから急に客がたてこんで、ヨシ子と私とは碌に口がきけなくなった。ジャクソン伍長が「パレス」の上層部にいる人間だということが分ったので、みだりにものを言うわけにはいかなかったのかもしれない。私自身も、大層残念そうに向うへ行ってしまった彼に悪いことをしたという小さな悔いを覚えた。中でも、女がほしいのならあちらへ行く。だから心配するなど言った彼の言葉に、私は少なからず感動していた。

ジャクソン伍長が、あちら、と言ったのは、「パレス」の内部のことである。クロークの前を通り抜ければ、あちらには全く女たちが溢れていた。私同様に碌すっぽ英語の出来ない女たちが、分りもしない相手の言葉に応えて、げらげら笑い崩れ、抱き寄せられては嬌声をあげていた。全く欲しい人間には与えられる女たちなのであった。どういふものか彼女たちは例外なく赤や黄や緑の原色のドレスを着ていた。

だが私が感動したのは、私がジャクソン伍長によって、そういう女たちから区別された為ではない。私は実はそういう女たちの仲間入りをしようと思つて英会話の勉強を始めていたのである。クロークの中で働く堅気の女たちも、ダンサーとして働く怪しげな女たちも休憩室は共有だったので、私は休憩の度に休んでいる女たちからダンスの基本的なステップを教わることにしていた。いずれそういうものが必要になると考えたからであつた。

人間というのは贅沢なものだ。贅沢に對してすぐにつけあがり易い。初めて「パレス」に来た日の朝、手渡された金額にあれば感激した私は間もなくその給料に狎なれてしまったのだ。母と妹が私の収入で充分着ることも食べることも出来ているのに、私は十円でも余計に収入のある方が望ましくな

っていた。木村ヨシ子はいつの間にか進駐軍物資の横流しに与_よっていて、クロークの収入以外にござり儲けては身装_なりをパリツとしたものにして、一頭地を抜いたように美しくなっていた。帽子から靴まで、つまり頭の天辺から足の先までアメリカ製品で掩_{おほ}いつくすと、格別美人というほどでもない器量だったのに人目を惹き、得意そうに小鼻をうごめかすと相当な別嬪_{べっぴん}さんに見えてくるのだから不思議だった。

私の当面の目標はこの木村ヨシ子だったが、彼女は自分のグループに私を入れる気はないらしく、たし、私としても私の英語ではG Iの配給品を値切った後も、彼らに気をよくさせるだけのお世辞は振りまけなかったから指をくわえているよりなかった。私はともかく厚さ二センチ半もあるテキストを丸暗記して、そこに書かれている言葉だけでも自由にこなせるだけの努力をしていた。(この道をまっ直ぐ行けば総司令部に出られますか?) (この水は飲んでも大丈夫ですか?) (私はすぐ出かけなければなりません。用件はできるだけ手短かに話して下さい)

トーマス・ジャクソンが私にデイトを申込んだのは、それから間もなくだった。非番の日、彼は一人で「パレス」に来て、踊りもしなければ碌に酒も飲まずにクロークにコートを預けると、吃驚_{びっくり}するようなチップを置いて帰ったりしていたから、早晚そういうことになるとは考えていた。私の休みの日どりは、彼は事務所で簡単に調べることができたので、「パレス」で遊んだ帰りに例によってチップを私の掌に押込みながら、

「明日、映画を見ませんか、笑子_{えみこ}さん」

と丁寧な口調だった。

「どんな映画?」

彼はベラベラと映画の題名を言ったが意味がとれずにぼんやりしている私を認めると、慌てて映画

が嫌やだったらアーニー・パイルにショオを見に行ってもいい、と言い直した。東京宝塚劇場は進駐軍に接収されてからアーニー・パイルと名をかえてG Iたちに慰安として豪華なショオを公演しているものであった。私は、喜んで行くと言えた。心の中の喜びは隠せなかった。私はこれまでにデイトということはしたことがないし、男から映画などに誘われたのもこれが初めての出来事だったからである。私はうきうきして木村ヨシ子たちに明日はジャクソン伍長とデイトをするのだ、アーニー・パイルのショオを見に行くのだと見せびらかすように喋ったが、二人は顔を見合わせて意味ありげな薄嗤（うすわら）いを浮べてから、アーニー・パイルのショオは素晴らしいわよと答えた。

デイトはG Iたちのクラブの食堂で、豪華な食事から始まった。ここは「パレス」と違って黒人より白人の方が多く出入りしていた。あんな大きなステーキを私は生れてから見たことがなかったし、食後のパイに乗っかっていたアイスクリームのような美味は、まったく生れて初めてのものであった。私は人間が正直に出来ているものだから、この感激を日本人らしく慎ましく黙って抱いているわけはいかなくて、一生懸命胸の中でテキストの頁を繰ってから、たどたどしい英語を大声で、「私は私の生涯において、この素晴らしい食事を忘れることは出来ないでしょう」と言った。

トムは大変に喜んで、自分もこんな素晴らしい食事をしたことはこれまでの生涯においてなかった。原因は笑子が一緒だからだと答えた。英語というのはなんとという大仰な表現を使うものだろうかとは自分の言ったことは棚にあげて可笑しくなっていた。

トムは健啖家だった。生野菜のサラダを一息で平らげ、肉はグチャグチャに切り細裂いてから右手にフォークを握み直して、ビールを合の手に飲みながら勢よく食べていた。西洋料理の食べ方に不馴れな私が、おかげで気楽に出された料理の味が分ったくらいである。食事中、トムは何度もフォーク

を止めて食べている私を満足げに眺めては、

「グー？」

と訊く。

「グー、グー。ベリーグー」

と答えると、一層満足して、トムは自分もまことに美味しいと言って馬鈴薯じゃがいものフライをムシヤムシヤと食べた。

アーニー・パイルのシヨオは話に聞いていたよりもっと目に眩ゆく美しかった。出演者の大半は日本人で、それが並んでライダンスなどをしていたが、こればかりはどうも貧弱で見られなかった。間を縫って白人の歌が入り、白人のソロ・ダンスが踊ったのが、だから一層美しく映えたのかもしれない。ともかく戦前も碌すっぱ娛樂らしいものには接したことのない私には、これもまた生れて初めて見る舞台だったのである。戦争が終ったことをあらためて感じ、そして私は日本人はアメリカに敗けたのだとまた感じなければならなかった。戦争中、私の働いていた軍需工場にも随分慰問団がやってきたけれども、こんな大がかりなものは一つもなかった。戦争に勝って、敗けた国民たちをライダンスに使用して、母国の唄や踊りを見ろというのはどんなにいい気持なものだろう——と私は隣に腰をおろしているトムの横顔をじろじろと眺めていた。

トーマス・ジャクソンはそれを誤解したのかもしれない。やにわに私の片手を握むと、大きな掌の中に私の掌を握り込んだ。私は狼狽し、声をあげそうになり、それから周囲の人々の気配を窺うと、それまで気がつかなかったが劇場に来ている人間は例外なくカップルが多く、女の大半は日本人たちで、どのカップルもまるでそうしなければならぬもののように手と手を握り合わしていた。これがアメリカ式なのかしらと、私はトムを拒む理由が見つからないままに鷹に捉えられた小鳥のようにじ

つとしていた。もっとも、悪くない気持だった。トムはデイトの始まりから怖ろしく紳士的だったし、私の一挙手一投足に敏感に反応していて、もし私が彼に手を握られるのが嫌やだという素振りを示したなら、すぐに手を放すことは分っていた。だから私はじっとしていた。そして胸をときめかしていた。私の手を握っているのは、紛れもなく男なのだ。あるいはそれが劇場におけるアメリカの礼儀とか習慣というものであっても、嫌いな女にデイトを申込む筈はなかったから、トムが私に好意を抱いていることは分っていた。トムがニグロであることに私がそのとき特殊な感覚を持たなかったのを不思議に思う人がいるかもしれない。しかし一年以上もニグロばかりが出入りするキャバレーに勤めていた私は、いつの間にか黒い肌には馴れてしまっていたらしい。それに劇場の中では白人も黒人も別なく同じ席にいて、どの兵隊も殆ど日本の女と並んでいた。だから私は恥じる必要はなかったし、それどころかまるきりうっとりとしながら、思春期と呼ばれる女学生の頃、戦時体制に入って男の子に胸をときめかすことも擬似恋愛の経験さえも持たなかったことを思い出していた。敗けた事實はやはり嫌やなものであったが、戦争が終ってなまめかしい平和が訪れているのをこうして知るのは悪いものではなかった。トムの大きな掌は、時々ゆるやかに動いて握りしめた私の掌を揉みほごすように愛撫していた。私の指の間から奇妙な汗が滲み出ていた。

この日のデイトの間に、私は遂に一度もトーマス・ジャクソンをニグロだと意識したことがなかったのは不思議だった。今になって考えてみれば、あの日の私は、勝ったアメリカ兵と敗けた日本人とのデイト、私にとって初めての男とのデイトということより他には考える余裕が無かったからではないかと思う。

翌日ヨシ子たちは故意に私に昨日の首尾を訊かなかったが、私もまた故意に黙っていた。トムは帰りに私の家まで送って来て、この次の休みの日には私の家族に会いたいものだと言い、そのときには

山のように沢山の罐詰を持って来ると私に約束した。私はジャムと砂糖も加えてくれるように頼んだ。私はPXの閑流しを始めるつもりだったのである。だからこの話をヨシ子にするわけにはいかなかった。

次の休日、トムはジープで阿佐ヶ谷の私たちが間借りしている家の前に乗りつけ、食料品の一杯詰ったボール箱を三箱も取出したあと、私の母に砂糖を三十ポンド、私の妹のためにはビニール製のテカテカ光る赤いハンドバッグを贈物にといつて捧げた。母は狂喜したし、妹は嬉しさに顔をあからめ、ハンドバッグを抱いたまま部屋の隅に縮んでいた。私たち親子三人は四畳半一間に間借りしていたのである。

「トムさんにおもてなししなくっちゃいけないけど、どうしようねえ」

「そこらのものを開けたらいいでしょう」

「おもたせをかい？」

「おもたせなんて物じゃないわよ。これからどんどん運ばせちゃうんだから」

母はトムを歓迎して、トムの持つて来た罐詰を開け、それから番茶を入れて彼にすすめた。トムと私は罐詰のビールに穴を開けて乾杯した。私たちに間貸しをしている家の主人夫婦と子供たちもいつの間にか加わっていた。主人は、こんな美味いビールは飲んだことがないといい、ポップコーンを手握みにして頬ばりながら、自分の妻や子たちに食べる食べろとせきたてた。ビールを飲まない連中は、コココーラの振舞いを受けた。母と妹は前に一度か二度味わっていたから驚かなかったが、他の連中はこの不思議な飲料に嘆声をあげた。

「笑子さん、通訳して下さいよ。私はねえ、トムさんに会えて嬉しいってね。それから日本が好きですかって訊いて下さいよ」

罐詰一つのビールで早くも赤い顔になった男は、口から泡のように言葉を噴き出しては私に通訳しろと言いだした。私も浮かれて通訳していた。ヨシ子たちの前では自信のない英語が、この英語の分らない日本人ばかりの中では実に滑らかに私の口をついて出たのは奇跡だった。人々は私の英語の上手なのに驚いて、私の母でさえも私を尊敬する様子を見せた。

トムも上機嫌だった。私の通訳に依じて彼は大きな身振りで喋り始めた。それは概ねこういうものであった。いや、そのとき私が通訳した通りの日本語で書いておこう。

「私も同じです。皆さんに会えて本当に嬉しい。日本は大好きです。日本の国も、日本の人も大好きです。戦争は私たちも嫌やでした。本当に嫌やでした。勝ったものも敗けたものも同じでしょう。だから戦争のことは全部、忘れよう。ここには平和がある。そして何より素晴らしいものがあります。それは平等です。平等があるから、だから私は日本が大好きです。アメリカに帰りたくない。日本に一生住みたいと思っています」

平等などという大きな言葉ビッグ・ワードが私が覚えていたのは例のテキストの第一頁に（連合軍は日本の国民に平和と平等を与えるために進駐してきたのです。あなたがたの自由も財産も守られています）というのがあったからである。これはアメリカ兵たちのスローガンに違いなかった。

トムの返事を聞いた人々は喜んで、殊に彼が日本を好きで、それはアメリカに帰りたくないほど好きで、永住したいくらいに思っているというところでは大受けに受けた。

「こんなに焼野原になつて東京を見ても好きなんですかねえ」

「我々は直ぐに美しい建物を建てて東京を復興します」

「食物が碌になくっても日本はいいです」

「食物はみんなアメリカからこうやって運んでくれば、OKですよ」